

講評

I

出典『〈食〉の記号学-ヒトは「言葉」で食べる』（五明紀春）大修館書店ドルフィン・ブックス

菊池寛の短編小説「形」の中に登場する“猩々緋の鎧”を題材にして、コピー食品がホンモノの食品とどのような関係にあるのかを説明しています。オリジナルとイミテーションの関係構造を正確に把握することがポイントです。

問1【漢字問題】（解答番号は①～⑩）

正答と正答率を示しておきます。

a 瞭然(83%) b 駆使(92%) c 精巧(83%) d 畏怖(67%) g 意匠(53%)

問3【前後の文脈から適切な接続詞を選ぶ問題】（解答番号は⑬～⑮）

空欄Ⅰは前の事柄に後の事柄を付け加える働きとなります。空欄Ⅱはその前後で文脈が逆転します。空欄Ⅲの前後が原因・結果となっています。正答率は58%でした。

問4【前後の文脈から適語を選ぶ問題】（解答番号は⑯～⑲）

空欄甲の前で説明されたコピー食品のつくり方の特性を把握する必要があります。正答率は78%でした。空欄乙の直前にある「形式こそ実質」がヒントです。正答率は36%でした。空欄丙の直前にある「ただ身をまかせるだけで」に注目する必要があります。正答率は53%でした。

問5【前後の文脈から適切な文を選ぶ問題】（解答番号は⑳）

空欄アの直前にある「影武者をしたてて敵の目をくらましたり、変装して落ちのびたりする」ことは、猩々緋の鎧と同じように戦場での振る舞いに関することで、一見共通点があるように思えることの例示です。しかし、「ちょっとちがう」という表現があることから、ここには似ているけれども異なっているという趣旨の文が入ります。正答率は61%でした。

問8【内容理解に伴う傍線部の説明問題】（解答番号は㉒）

①・②・④・⑤は本文に書かれていない内容が含まれています。正答率は61%でした。

問9【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は㉓）

「槍の手練」は「猩々緋の鎧」という「形式」とは異なる武士の実力を示すもので「実質」に相当しますから、①が本文の内容に合致しません。正答率は47%でした。

問10【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は24）

食品の関係構造のなかに強力な地歩を固めきっているのは、ホンモノのカニ足、ホタテ貝、カズノコ、イクラなどの「つわもの」であり、これらは「実質」です。正答率は33%でした。

問12【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は26）

ニセモノ自体が独自の創造物であるという本文の趣旨が鍵になります。②「ホンモノの存在に対抗して、ニセモノをホンモノ以上にすること」は本文にありません。③はニセモノの創造性に触れていません。④は表面的な類似性、⑤「さまざまな新しい技術を開発することになる」はニセモノの創造の意味を示しているわけではありません。

Ⅱ

出典『忘却の整理学』（外山滋比古）筑摩書房

忘却こそが思考や創造の手助けをしてくれるものであるという考えに立って、忘れることの大切さを説いた本です。わかりやすい言葉で論理的に書かれた文章ですので、容易に文意を掴めるはずです。

問1【漢字問題】（解答番号は27～36）

正答と正答率を示しておきます。

a 伯仲(14%) b 敬愛(97%) c 精進(81%) d 旺盛(78%) e 酔狂(64%)

問3【空欄補充・前後の文脈から適語を選ぶ】（解答番号は39・40）

空欄「甲」には、ライバルが無事にいることを意味する語が入ります。正答率は72%でした。忘却が敵と目されるのは通常のことですから、空欄「乙」に入る語は容易にわかります。正答率は78%でした。

問4【空欄補充・前後の文脈から適切な文を選ぶ】（解答番号は41）

空欄「ア」と同じ段落内で敵を持つことの必要性を説き、「汝の敵を愛せよ」とまで述べていることがヒントになります。正答率は53%でした。

問5【空欄補充・前後の文脈から適語を選ぶ】（解答番号は42）

空欄「ウ」の後ろにある「敵がないのはつねに危い」がヒントです。正答率は64%でした。

問9【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は46）

傍線部Dの4行後にある「その忘却のエネルギーを～発揮されることになる」を正確に捉えることが重要です。⑤を選んでいる受験者がいましたが、「忘却の攻撃の矛先が記憶に向かってしまい」が著者の説明と違ってきます。正答率は61%でした。

問10【内容を理解して小見出しを選択する問題】（解答番号は47）

「記憶力の危機はそれにとどまらない」がヒントです。正答率は69%でした。

問11【内容合致問題】（解答番号は48・49）

完答ということもあって正答率は8%にとどまりました。③、⑧を選択している受験者が多かったです。本文の第三段落に「こういう好敵手を敬愛する心の深さをもっている人は、ライバルがいなくなっても、重大な打撃を受けなくてすむであろう」とあり、ここでの「こういう」は前文の強い人を受けた言葉ですから、③は誤りです。⑧は本文の第七段落にある「好敵手でなくても、人間は、つねに敵をもっていなければならない」という文と内容的に合致しません。①・②・⑥・⑦・⑨はいずれも後半部分の説明が本文の内容と異なります。